

京都・東九条 CAN フォーラム ニュースレター

2009年9月20日

No.002

ポスト同和行政と今後のまちづくり

京都・東九条 CAN フォーラム 事務局

この号の内容

- 1 ポスト同和行政と今後のまちづくり
- 2 ミニコンサート「EAST9ライブ & トーク」が開かれる
- 3 7月連続学習会「多文化共生をめざして」
- 4 8月連続学習会「他国に見る多民族多文化コミュニティ」
- 5 事務局からのお知らせ

東九条は、日本有数の部落と言われ「オールロマンス事件」で有名になった崇仁地区に隣接した、京都市の中で最も多く在日外国人が居住する地域です。戦前から戦後にかけて、この地域では民族差別や貧困にあえぐさまざまな境遇の人々が肩を寄せ合い生きてきました。その中であって、部落民と在日は、被差別者としての『連帯』というよりも、むしろ確執の連続であり、たがいに差別し、いがみ合うことを強いられてきたといえます。

その原因の一つに、「属地属人主義による同和行政」の在り方や、同和対策事業、住宅改良事業が大きな影を落としていることは否めません。京都市もポスト同和行政として、あらゆる差別を乗り越えた人権文化の息づくまちづくりの実現を追求するべきであると、新しい自立のイメージを多文化共生、地域交流をコンセプトに求めてゆくという東九条からの新たなまちづくりの発信を評価しています。

現在進行している北河原市営住宅建替・合築事業にも「崇仁地区と東九条の地区自体が強大な複合施設となり、歴史と文化を柱とした市民活動、福祉、多文化交流、あるいは人権学習の拠点として機能する可能性を持っている。要は地域が、市民が主体的にどう使ってゆくかであり、主体的にどうくまちを考えてゆくかである」と、地域と京都市民が主体であることを強調している。

率直に言って、在日外国人がく地域と市民としてどう関わってゆけるのか、その道筋が見えてこないし、システムがあるとは言えない。生活館事業に代わる新たな事業計画に多文化共生地域交流事業が検討されていると聞かすが、自主的な参与を保証してもらえるのか疑念をもてしまう。まちづくりを推進するに当たり、地域で「外国籍市民懇話会」のような意見を聞き、参与を促す場が持てないものであろうか。

ミニコンサート「EAST9ライブ & トーク」

2009年8月8日、故郷の家・京都の文化ホールにおいて京都・東九条 CAN フォーラムの連続学習会に先立ちミニコンサートが開催され、約50名が楽しんだ。

イーストナインとは、東九条出身の元暴走族の悪ガキが音楽に目覚め結成したヒップホップグループで、京都のみならず近畿一円のライブハウスで活躍している、知る人ぞ知る有名グループ。チラシ用に提供された写真はいかにもと言わんばかりの悪面で、日頃ヒップホップとは縁のない、まちづくりを考えるような生真面目な中高年層に、どのように受け止められるのか心配されるところであった。大音響で始まった彼らのライブに、初めこそ戸惑いのあったものの、フィナーレの彼らのオリジナル曲「東九条」が始まるころには会場全体がの熱い空気につつまれた。会場からは「見かけによらず、メロディーも歌詞もよかった、彼らの音楽は、ナイーブかつチャレンジフルでした」「東九条を誇りにしたい気持ちは、反抗してきた彼らの人権宣言です。共感します」などの声が聞かれた。

京都東九条 CAN フォーラムでは、「東九条で何かが変わりつつある」という雰囲気を感じ取り上げていくために、今後も東九条と関わりのあるミュージシャンを招いてイベントやミニコンサートを継続開催する計画も検討されている。いつか、「京都東九条ミュージックフェスティバル」にふさわしいまちのイメージが生まれたいな!!

とにかく、東九条を日本中で有名にしたい。僕らの生まれ育った東九条はカッコイイと、日本中の人に思わせたい。



CAN フォーラム連続学習会第1回「多文化共生をめざして」

去る7月4日、CANフォーラム活動方針の一つである連続学習会の第1回目がエルファセンターにて行われました。この日は立命館大の小澤亘先生から「多文化共生をめざすもの」をテーマに提言頂き、会員含む約30人が学習しました。

文化によって生じた問題なら、文化によって乗り越えることができるはず、そのための文化的ネットワーク育成の視点とそれに向けたステップが重要



立命館大学産業社会学部教授
小澤 亘

文化主義のジレンマもエスニックグループ自体の苦痛も存在しており、その克服には経済的側面だけではなく文化・教育面からのアプローチが大切

「多文化共生のまちづくり」が歴史上の必然性を有していることに確信を持つと同時に、各地の成功事例に学ぶなかで京都の強みと弱みをしっかりと踏まえた実践が求められている

● 多文化共生という概念

冒頭小澤先生より、昨年12月京都市より出された「京都市国際化プラン～多文化が息づくまちを目指して～」を市民の立場からどう活かしていくのか一緒に考えていこうと呼び掛けがあり、同時に学習メニューとして①多文化共生という概念②国民国家と多文化共生③多文化共生のための戦略の三点が示されました。

「多文化共生という概念」の中では、生物学・生態学・人類学等を援用しながら人類の集団形成過程における「まとまる原理・排除する原理」の歴史性が語れ、その中での「多文化共生」の意味、違う文化の混在は「生き方の多様性＝豊さ」と捉える視点の大切さが強調されています。同時に文化によって生じた問題なら、文化によって乗り越えることができるはずで、そのための文化的ネットワーク育成の視点とそれに向けたステップも併せて提起されました。

● 国民国家と多文化共生

「国民国家と多文化共生」では、近代社会を生み出した「近代国民国家」形成の歴史と、17～20世紀における自由権・所有権・選挙権等の獲得と普遍化、さらに第二次世界大戦以降に獲得されてきた社会権や文化に関する権利の延長上に「多文化共生」が存在している事が語られました。またその中では文化相対主義、即ち「他文化を鏡として自文化理解」「文化間の優劣問わず」「文化の違いを構造的に理解」のキーワードが提起されています。またこうした人類の発展過程を経てすでにカナダ・フランス等多文化主義国家が登場していますが、その意義にも関わらず多文化主義のジレンマもエスニックグループ自体の苦痛も存在しており、その克服には経済的側面だけではなく文化・教育面からのアプローチの大切さを今若者に受けている劇画の分析を通して強調されています。

● 多文化共生の戦略

「多文化共生の戦略」では、第1に川崎市の外国人市民会議等各地の事例を挙げながら政治参加の現状と、そこに至る迄の差別撤廃闘争の意義が提起され、今後の論議の中での重要性が語られました。第2の戦略では80年代以降の京都におけるNPO等の外国人生活支援の動きに見られる在日コリアンの立ち上がりと当事者のエンパワメントの重要性が挙げられました。第3には「東九条マダン」に見られる文化の重要性、それをさらに活かす為のメディアの活用や語学教育からのアプローチ等が出されました。

今回の学習会は大学での講義内容を短時間で且つ噛み砕いて頂くという小澤先生に相当無理を御願ひした次第でしたが、何故いま「多文化共生」なのか、また「まちづくり」にどう活かす事が出来るのか、多くの啓発が含まれている様に思います。提案頂いた内容のうち、当事者間でも賛否両論がある「参政権」問題等 CAN フォーラムとして統一見解を出すに至っていない内容もありますが、私たちが掲げる「多文化共生のまちづくり」が歴史上の必然性を有していることに確信を持つと同時に、各地の成功事例に学ぶなかで京都の強みと弱みをしっかりと踏まえた実践が求められていると思います。ここ京都でも数多くの団体・個人の動きがあり、その事が京都市の「国際化推進プラン」に結実しています。これを「まちづくり」にどう活かすか、私たちが今後更に広い視点で学習し且つ実践して行く事が重要であることを再認識しました。

CAN フォーラム連続学習会第2回

「多国にみる多民族多文化コミュニティ」

原尻英樹(立命館大学産業社会学部)

超マージナルマン、かく語る

2009年8月8日、故郷の家京都ホールにて東九条 CAN フォーラム第2回連続学習会が行われた。原尻英樹さんは大学時代に朝鮮語を学び、韓国旅行をきっかけに在日への差別問題を知り、それ以後筑豊の集住地域を皮切りに、在日の生活やコリアンタウンについて各地のフィールドワークをおこなっている。このご経験から、日本と他国の異なりを国家レベル・地域社会レベル・人レベルの3つの次元について講演をおこなった。

まず横浜中華街と朝鮮人部落の異なり、アメリカのコリアンタウンと日本のコリアンタウンの歴史形成の異なりについて説明した。「アメリカには100万人以上のコリアンが住んでおり、ほとんどが戦後移民している。日本女性がアメリカ人と結婚すれば、その本人1人が移住するが、コリアンは両親、親戚も移住する。朝鮮半島の情勢もあり、ある意味で国を捨てていった人たちである。それに対し、日本は植民地政策が背景にあるが、1世の人たちは「日本で一旗あげるぞ」と日本にやってきた。1世の生活力の背景にはこのような事情がある。」と話した。「研究よりも文学や音楽、映画のほうがこのような内容をきちんと捉えている。」と指摘した。

また異なる文化をもつものたちを受け入れる日本社会の矛盾にも言及した。「コリアン・アメリカンの妻が日本社会で暮らしていくために①知っていても知らんふりをし「教えてください」という、②自分を出さないこと、③頭をさげること、④目立たないことが重要だと伝えた。日本社会は表向きは受け入れていても実は排除している。

アメリカ社会にも、日本社会にも、民主主義・人権・主体性という同じ言葉があるが意味がぜんぜん違う。マイノリティの宿命としてマジョリティと同じことをしていると生き残れない。たとえばユダヤ系の人たちは歴史的に虐殺を経験しており、生き残るためには人権を守らなければ殺されてしまう。日本の寄り合いはとにかく月1回集まって話をして仲良くなる。で、1年ぐらいするとお互いのことがわかるようになり、あうんの呼吸で作業が一緒にできるようになる。大切なのは感情だ。そういった社会である。しかし、外部のものには理解できない。」

原尻さんはさらに多文化主義を日本で広めていくためには、言語化の必要性を強調した。「例えば、群馬県大泉市の大家さんは、新しく借りる日系人に“畳の上は素足である”と説明した。なぜ、そうなのか、言語化しなければ外国人にはわからない。いちいち説明することは面倒なんだけど、面倒なことをしつづけていけないといい社会にならない。」「在日と日本人とのコミュニケーションがどうあるのが大切であり、その中に自分の成長がある。今度総選挙が行われるが、どの政党が勝利するにしても新たな社会をつくりたいのかということをも未来の自分の子孫のために、われわれが決めていくことが大切である」と講演は締めくくられた。講演では「ギザギザハートの子守唄」(在日2世の康珍化さん作詞)、「恋の唄」(布袋寅泰さん作詞)が原尻先生の歌声によって紹介され、その中に込められた共生への道筋が解説された。

なぜそうなのか、言語化しなければ外国人にはわからない。いちいち説明することは面倒なんだけど、面倒なことをしつづけていけないといい社会にならない。



立命館大学産業社会学部教授
原尻英樹



- 個人会員 1口 1,000円
一口1,000円で何口でも結構です
- 団体会員 1口 5,000円
一口5,000円で何口でも結構です

- 賛助会員 いくらでも結構です
活動に使わせていただきます
- 特別会員 会費負担なし
どんどん活動に参加してください

多くの活動資金を必要とします、ぜひ、2口、3口とご協力ください。

振り込口座: ゆうちょ銀行 00910-7-216594 口座名義: キョウト・ヒガシクジヨウキャンフォーラム



事務局からのお知らせ

이강시 구조 마당
いこか つくろか 東九条マダン

2009. 11. 3



- 11月「東九条マダン」の月

<http://www.h-madang.com>

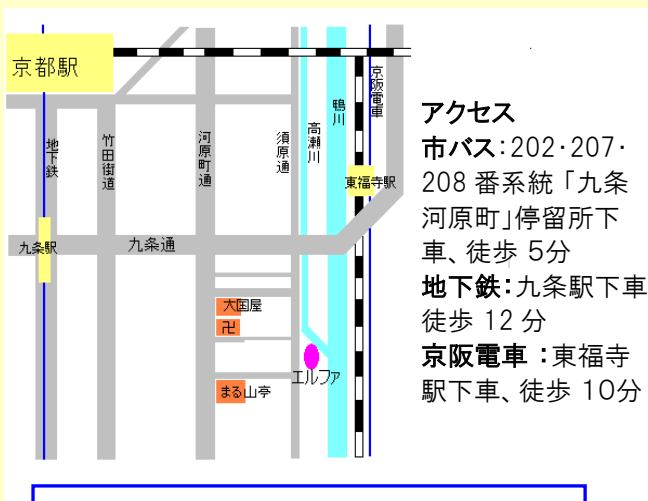
日時: 11月3日

場所: 京都市立陶化中学校校庭

CANフォーラムも当日に屋台を出す予定です。

コンナムルパップ(豆もやしと豚肉の入ったごはん)を食べてみませんか。韓国ではとてもポピュラーですが、日本での韓国料理のお店では売っていません。超マージナルマン原尻教授のレシピによる、京都初公開です!!

- エルファセンター地図



京都・東九条 CAN フォーラム

〒601-8013 京都市南区東九条南河原町3

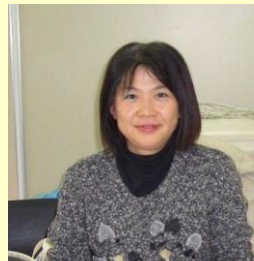
075-204-7900

<http://higashikujoforum.jimdo.com/>

E-mail/higashikujoforum@gmail.com

毎回参加資料代として 500 円をご協力ください

- CAN フォーラム連続学習会その3



福岡ともみ

1956年 愛媛県生まれ
1999年からドメスティック・バイオレンス被害者や性暴力被害者のサポートに関わる。

時間: 2009年10月17日(土)18:30~

場所: エルファセンター(地図をご覧ください)

テーマ:

「人が人らしく生きて行けるまちづくりのために」
部落民というひとくくりから「私」、「私」から関係性を紡ぐ

ドメスティック・バイオレンス被害者や性暴力被害者のサポートに関わるきっかけはDV被害者が加害者となってしまった事件の裁判。それまで、生まれ育った地域が被差別部落であったことなどを契機に被差別マイノリティの権利擁護や「人間と差別」の課題に取り組んできていた。現在は、女性のためのサポートを中心に活動している。2001年からNPOなら人権情報センター相談員。2007年6月からウィメンズカウンセリング京都所属セクハラ専門相談員。《共著など》『家族支援論1人ひとりと家族のために』(相川書房・得津慎子編著)、「笑顔を取り戻した女たち マイノリティ女性たちのDV被害—在日外国人・部落・障害—」(パド・ウィメンズ・オフィス/社団法人東京自治研究センター・DV研究会編)

- CAN フォーラム連続学習会その4(12月)
テーマ「住みやすいまち、福祉コミュニティとは」
加藤博史 龍谷大学教授、時間場所未定